

工業と生活様式

中 田 栄 一

地理学の領域も多様化して、さまざまな問題がさまざまな方法で調査され研究が行われているが、経済的合理性を基軸に工業立地や工業地域の諸問題と取り組んでいる工業地理学の分野と、地域的社会的特殊性の質的機能的分析を追究する文化地理学の分野は、領域的にも方法的にも全く相異なるもののように感じられる。しかし、地域の諸問題を探究する地理学の領域として、両者が何らかの関連をもつことはいうまでもない。

昭和30年代に、故石田龍次郎先生を中心とする工業化グループの一員として、村落工業の諸問題と取り組んでいた頃、工業地域の形成・展開・存続と生活様式や文化との関係について考えさせられるいくつかの問題に直面した。極めて自明のことといえるかもしれないが、地理学の多様化が進んでいる今日、両者は全く異質的な問題として相互に関与しようとしないうらいがあるように思われる。

かつて伊勢崎機業地域の調査を行っていた頃、本庄を中心とする併用緋の生産が、依然として江戸時代以来の手機による出機によって行われていることについて興味を感じた。生産の機械化が進み大規模化が進行する中であって、なぜこのような生産の方式がとられているのであろうか。それは製品の性格が、手機によって経糸と緯糸とを丹念に織って、多種多様の美しいデザインを浮き出さすことを特色とする手工芸品的なものである点である。機械化による量産化が困難である限り、依然として零細な規模で生産が続けられねばならず、農村や都市の多くの余剰労働力を利用して副

業的に製造されており、したがって広い賃機圏が形成されている。そしてその賃機圏はこのような性格の製品の需要の変動により拡大縮小する。その存続するのは、日本人の生活様式の中にこのような製品の需要が続けられる要素があるからである。行田の足袋の生産が需要の減退とともに靴下などの縫製に変わったことはその逆の例を示している。

木製建具生産の手工芸的性格や零細性も同様であり、わが国の民家の型式が地域的多様性を持ち、規格がさまざまである限り、その性格は存続する。しかも、個人的趣味による注文生産はいっそうそれを助長する。民家の型式や建具の様式は地域の大工・建築家の伝統的技術によって継がれていく。既製品を造る場合でも、建具の寸法や様式はおのずから限られ、量産化は著しく阻まれる。そして、建具工業における量産化、機械化、大規模化は規格建具の需要の拡大とともに進行する。それは建具のはめ込まれる家屋の規格化と併行し、日本人の生活様式の欧風化、等質化によるものである。そしてそれに伴ない、国内向のみならず、広く世界各国の欧風化、等質化の基調による製品需要に基づき、外国向輸出が増大し、日本の工業は広く世界各国民共通の製品の需要によって繁栄する。かくて日本の工業は、日本や世界諸国民の文化や生活様式の変化への対応の仕方によって盛衰し、工業地域の拡大縮小がみられることになるともいえるであろう。

(立教大学)